

アクティビティ・サービス担当教員養成講義計画表

科目名：アクティビティ・サービス科目担当教員資格取得研修

ねらい：教育現場において「アクティビティ・サービス」の教育の必要性を認識し、教授法、今後の教育の到達目標が明確になる

留意点：サービスの提供は主体的生活を営む人びとの生活支援技術

テキスト：アクティビティ・サービス ―心身と生活の活性化を支援する―

*発行所：中央法規出版株式会社

項目	回	目 標	内 容	方 法	テキスト
総論 第Ⅰ章	1～2 45分 ×2 90分 ×2 1・2 回目	①アクティビティ・サービスの定義を説明できる ②生活の快論と社会福祉の関係について説明できる ③高齢者・障がい者の余暇とレクリエーションの関係について説明できる ④アクティビティ・サービスがもたらす利用者への効果について検討し理解ができる ⑤アクティビティ・サービスの対象が理解できる ⑥コミュニケーション力を磨く	*アクティビティ・サービスとは何か ・アクティビティ・サービスの定義、言葉の誤解、各セラピーとの違い、垣内理論(生活の快論) 生活の快と社会福祉の関係 ・高齢者や障がい者の余暇とレクリエーション ・アクティビティ・サービスの効果(心理的・生理的・文化的・社会的・物理的) ・アクティビティ・サービスの対象の状態 ・対象者へのアプローチに必要なコミュニケーション能力(話す・聞く・聴く・訊く)	講義・GW・具体例 24時間のレポート作成 講義 文化的側面のレポート(地域) 効果面のGWと整理	P8～ p10～ p11～ p13～ p14～ p17～ p22～ p28～
各論 第Ⅱ章	3～5 45分 ×3 90分 ×2 3・4・5 回目	①生活支援学とアクティビティ・サービスの関係が説明できる ②人権思想(各種法律や憲法、憲章)と生活支援学の理解ができる ③生活支援における理念価値と現実価値の説明ができる ④生活していく上で文化・健康のとらえ方が説明できる	*生活支援学としてのアクティビティ・サービス ・生活支援とアクティビティ・サービスの関係 ・生活支援学の成り立ちと人権思想との関連性 生活支援の根拠法とアクティビティ・サービスの根拠 ・人権と人権を守った生活支援のありかた ・健康のとらえ方の共通理解 人の見方を健康面からとらえる 型にはまった見方でなくとらえる意義	生活の観点から具体例を示し生活支援の内容や方法を個別ワークする 講義 自己実現や願いの具体例を用いて理解 事例 WHOの定義 人生における健康のとられ方のGW 人間が作り上げてきた文化を	p 30～ p32～ p34～ p35～ p37～ p38～

		<p>⑤人間の持つニーズのとりえ方についてマズローや黒沢の階層性を用いて説明できる</p> <p>⑥生活支援と人間関係の形成が理解できる</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・文化のとりえ方と文化の創世の歴史 ・ニーズとは何か ・ニーズを把握することの意義と生活支援 ・生活支援学と人間関係 	GW 講義	p41～
各論 第Ⅲ章	<p>6～7 45分 ×2</p> <p>90分 ×2</p> <p>6・7 回目</p>	<p>①日本における法制度とレクリエーションの位置づけと介護福祉士養成教育への導入の理解ができる</p> <p>②福祉レクリエーションからアクティビティ・サービスの誕生の理解ができる</p> <p>③アクティビティ・サービス協議会の歴史の理解ができる</p> <p>④アクティビティ・サービスの周知と展開が理解できる</p> <p>⑤諸外国のアクティビティ・サービスの実践が理解できる</p>	<ul style="list-style-type: none"> *日本におけるアクティビティ・サービスの誕生 ・法制度とレクリエーションの導入の歴史の変遷 ・介護福祉士養成教育におけるレクリエーション科目の誕生 ・福祉レクリエーションの理論とアクティビティ・サービスの理論の相違 ・レクリエーションとアクティビティ・サービスの方法・内容・考え方 ・アメリカのアクティビティの歴史的経過や目的及び特色 ・日本におけるアクティビティ・サービスの専門性の確立 	<p>講義</p> <p>GW</p> <p>講義</p> <p>GW</p> <p>講義</p>	<p>P52～</p> <p>P54</p> <p>P59～</p> <p>P54</p> <p>P64～</p> <p>P68</p>
各論 第Ⅳ章	<p>8～11 45分 ×4</p> <p>90分 ×2</p> <p>8・9・10 回目</p>	<p>①アクティビティ・サービスの計画に必要な基本的考え方を理解できる</p> <p>②アクティビティ・プログラムにおける個別支援・集団支援の方法について理解できる</p> <p>③アクティビティ・ワーカーに求められる資質について理解できる</p> <p>④アクティビティ・プログラムの立案における留意点を理解できる</p> <p>⑤アクティビティ・プログラムの具体的な立案方法について理解できる</p> <p>⑥アクティビティ・プログラムの立案ができる</p>	<ul style="list-style-type: none"> *アクティビティ・サービスの計画 ・アクティビティ・サービスの基本的考え ・ニーズの理解 ・個別支援 ・集団支援 ・実践と心の動きの関連 ・支援者の資質 ・アクティビティ・プログラム計画の留意点 ・身体リズム・計画立案時の留意点・内容の留意点・リスクマネジメント・9つの要素の取入れ・実施にあたっての判断と実施時における留意点 ・計画書 ・計画書に基づく内容の記載 ・計画書の記載例1 ・計画書に基づく立案体験 	<p>講義</p> <p>事例検討 講義</p> <p>講義</p> <p>講義・GW</p> <p>演習</p>	<p>p 72</p> <p>p 73</p> <p>P77 P78</p> <p>P81</p> <p>P86</p> <p>P89</p>

各論 第V章	12～15 45分 ×4 90分 ×3 11・12・ 13回目	① ICF の意義と内容を説明 できる ② 人権思想の変革とアクテ ィビティ・サービスの関 係について理解できる ③ ICF における「活動」と「参 加」とアクティビティ・サ ービスの課題について説 明できる ③ ICF における背景因子と アクティビティ・サービ スの関連の説明ができる ④ ICF と介護過程について 簡単に説明できる	アクティビティ・サービス における ICF と支援の基 本について ・ ICF の意義と内容 ・ 人権思想の変革における アクティビティ・サービ ス ・ ICF における活動・参加と アクティビティ・サービ ス ・ ICF における背景因子とア クティビティ・サービス ・ ICF とアクティビティ・サ ービスの方向性 ・ ICF と介護過程 介護過程具体的計画とア クティビティ・サービス	講義 ICF モデル使用 して事例演習 p110	P104 P106 P109 P112 P115
各論 第VI章	0分 ×2 14・15 回目	① 日常場面と非日常場面の アクティビティ・サービ スの実践の理解ができる ② 事例を通して演習計画の 立案ができ指導ができる ③ アクティビティ・サービ スと介護過程の理解がで きる	*アクティビティ・サービ スの実践 ・ 日常生活場面でのアクテ ィビティ・サービス ・ 非日常生活場面でのアク ティビティ・サービス ・ アクティビティ・サービ スと介護過程	講義 GW	P121 P137 P154
資料の 活用		アクティビティ・サービ スの実践 ・ アクティビティ・サービ スの実践と全国の祭りとの 意義付け ・ 歴史分析からアクティビ ティ・サービスの実践を 読み取る ・ 高齢者の生活史、文化史・ はやり歌と関係とアクテ ィビティ・サービスの実 践	・ 実践の意義	各章において <u>適宜紹介</u> や <u>GW</u> に使用す る。 学修者がレポ ートするのに <u>適切な課題</u> と なる。	P162～